

17 津軽における貞享、元禄年間の

ケシ栽培の実態

松 木 明 知

津軽地方が日本で最初のケシの栽培地であったことは、演者の過去三十年にわたる研究によって徐々に解明されており、成果の一部は著書や論文の中で発表されてきた。

しかし中近東から地中海にかけての地域が原産地とされるケシが、どうして九州地方や中国地方を経由しないで、直接津軽地方に齎されたと考えられるのか、また津軽地方に齎されていたと言われている時期と実際に栽培されたことが実証される時期と数百年の差があるのはどうしてか、など解釈困難な問題が多い。

演者は、津軽地方の歴史研究に必須であり、最も正確な史料である弘前藩庁日記(以下単に弘前藩日記と略す)の貞享年代から元禄年間初期までを精査し、津軽地方にお

けるケシ栽培について、より詳細な状況を明らかにし得たので報告する。

弘前藩日記の最初に阿片の記事が披見されるのは、貞享三年(二六八六)五月十六日の条であるが、二番目の元禄二年(一六八九)の左の記録は甚だ重要である。

元禄二年五月二十五日

一、阿芙蓉、阿遍んの事

一、屋かん草、からす扇の事

但葉斗花柴を入申候、紅但若い者

悪敷候事

一、かいこ夏子二番、夏蠶蛾

但牝虫者貝かたち大也。

牝虫ハふキより分ケ取可申事。

右之通、御葉之御用ニ候間取セ候様ニと、從江戸申来由ニ而、松山玄三申立候ニ付、寺社方并町在々江申触取之候様ニと、夫々江申付之。尤右之御葉種取候時分、歩行目付立合可申越申付之。(訓読点筆者)

右の記録は詳細に見ると甚だ重要である。

まず阿芙蓉を「阿遍ん」つまり「阿片」とを明記しているからである。このことはケシを栽培したのは、間違いない薬物としての阿片を採取するためであつて、鑑賞すべき花としての阿芙蓉でなかつたということである。

弘前藩日記の後年の記録を見ても、「阿芙蓉」は花を意味したのではなく、「阿片」を意味したのである。ケシの花に対しては「阿芙蓉の花」または「ケシの花」という言葉を用いている。からす扇やかいこは津軽一粒金丹の成分である。

右のような薬を準備するようにとの要請が、江戸から伝えられたとある。津軽藩医の和田玄良が、一粒金丹の製法を池田丹波守の医者木村道石から伝授されたのは、元禄二年（一六八九）五月五日であつた。和田玄良は伝授されて直ちに、一粒金丹の製造に必要な薬種を準備するよう国許の津軽に伝えたものと考えられる。当時江戸からの書状は約二週間と少して、弘前に送られていたからである。その結果、弘前藩日記の五月二十五日の条に記載されたものであろう。

右の元禄二年の記録は、弘前藩がこの年になって始めて正式に一粒金丹の製造を開始したことを示す好史料である。なおこの年の六月五日と六月十七日の記録によつて阿片は五十六匁二分製造されたことが知られており、この記録も重要である。

これより三年前の貞享三年（一六八六）の五月十六日と二十三日の二回、阿芙蓉に関する記事がある。その内容は薬としての「阿芙蓉」を採取するため、御徒目付など十人、医者二人、掃除小人六人が派遣されたことを伝えている。監督者の一人は中川小隼人であり、弘前藩の忍びの者の頭であつた。この記録だけからは、貞享年間に既に一粒金丹として製造されていたのか否かは不明である。より完成された丸薬を製造するため、藩として元禄二年に池田丹波守に伝授方を依頼したのかも知れない。このことについても言及する。

（弘前大学医学部麻酔科）